



話題の本棚

鈴木大介著『ネット右翼になった父』

稲岡大志・森功次・長門裕介・朱喜哲編『世界最先端の研究が教える すごい哲学』

特集／京大作家インタビュー

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚／この一冊

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館2階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/

その分断はまだ、解消できるよ。

ネット右翼になった父

鈴木大介著
講談社現代新書



あなたは久々に帰省し家族団らんの時間を過ごす。夕飯を食べてテレビの前に座り、少し老いた親と何を語るわけでもない時間を送る。その時、父がテレビを見ながら突然信じられない言葉を口にする。「パヨクが「マスゴミのせいだ」「女は……」。

他人事ではない、身内がネトウヨになる。誰かを差別する存在が、家族にいる。その時親子はどうすればいいのだろうか……。



長く貧困の取材をし、近年では自身の体験を交えた障害者について本を書いてきた著者・鈴木大介。常に弱者に寄り添う立場でいた彼が本書で向き合ったのは実の父親だった。読書や勉強が好きな父は、幼少の頃から著者の憧れの存在だった。そんな父が晩年、自分が守りたい人間を差別する側に回ってしまった……看過できない。彼は心理的に距離を置き、父がネットスラングを繰り返す度に怒りの炎を燃やしていた。「あなたのためじゃない」。病床に臥す父を、著者は拒絶した。病院に付き添っているのはあなたのためじゃない、女性差別を繰り返す発言を、母が一人の時に聞かせたくなかったからだ。二人の溝は深まり父の死を迎えても埋まることはなかった。死から二か月後、著者は「ネット右翼になってしまった父親」とした

記事を書いた。いつまでも過去を忘れない望郷の老人として父を描いた記事は話題となり、うまく言葉にしたはずだった。

しかし、何か引っかかる。父は本当にネトウヨだったのか。父は退職後、中国に語学留学に出かけていた。家事をするのが好きで、働く母の姿を応援していた。……辻褄があわない、何かがおかしい。その何かを知るために死から一年半たった後、遂に検証を始める。著者は自らの母、姉、姪、そして父の知り合いを取材する中で、ネトウヨとして形容していた父の面影を追いかけて行く。

その後の展開をつぶさに語るのはやめておこう。確認しなければ、本書を開いてくれ。そこにあるのはすれ違い続けた親子の話だ。きわめて個人的で、だからこそ日常的で、ありふれた家庭の諍いだ。恥をみせるのが苦手な、強さばかりを見せたくて、本音を語れなくなった不器用な男たちの物語だ。本書はノンフィクションだが、極めて私小説のようでもある。真相を追いかけの中で、自らの偏見に辿り着き、それを超えた時に謝りたかった当人はもういない。しかし死は常に終わりではない。

私も一度だけ友人を失ったことがある。何年も親しくしていた友人が、ある時差別を繰り返す発言を始めた。驚きと戸惑いの中で私は心を閉ざし、友人との付き合いをやめてしまった。

≪「ネット右翼の父」は解消可能な分断である≫

著者のまとめのこの言葉を讀んだ時、自らの幼さを知った。弱いのは私で、見栄を張っていたのも私だった。「分断は解消可能だよ」こんな時代だからこそ、その言葉を胸に留めておきたい。(きもの)

(二四八頁 税込九九〇円 1月刊)

チャラい哲学。バツト、すごい哲学。

世界最先端の研究が
教えるすごい哲学

稲岡大志・森功次・
長門裕介・朱喜哲編

総合法令出版



本書は、英語圏の哲学で今日論じられているトピックを日本の若手・中堅研究者が縦横無尽に取り上げ、それぞれ数ページほどの短い分量でサクッと紹介する、類書を見ない哲学読み物だ。

まあ、お前らの言いたいことはよくわかる。カバーがクソダサイ(不相応に大きな眼鏡をかけたガキが思案している！)、胡散臭くて買う気にならない、恥ずかしくて人前で読めない……等々。

だが待て。俺の話の聞け。この場を借りて一席ふたせてくれ。いかにも軽薄でチャラチャラした感じの本書は、実は予想以上にすごい本なのだ(ただし、カバーが残念な件に弁解の余地はない)。

【p.125の「信頼のおける執筆陣」】

この手の読み物は「著者：サイエンスライター」というのが相場だ。しかし本書は、若手を中心として、最新の文献もしっかり読み込む25名の現役研究者が執筆している。一項目でも読めばすぐにわかるだろう。手堅い本だ、と。そう、見た目とは裏腹に堅実な本なのだ。これだけ多くの研究者が関わると本の内容はどうかなるか。

【p.125の「2-1 圧倒的な新しさ、圧倒的なバラエティ」】

もちろん多様になる。それも新しくバラエティに富んだ項目で

溢れかえる。「我思う故に我あり」やトロッコ問題などの手垢にまみれたトピックはもはや存在しない。代わりに大部分を占めるのは「企業がリモートワークを導入しないのは悪いことなのか?」、「小説を読むことで人はやさしくなるのか?」、「進次郎構文」は無意味なのか?」といった新しい問いだ。普段の生活で思い当たるような手のひらサイズの問いだ。

なに? イロモノだ、こんなものは本当の哲学じゃない、だと? ナンセンススツ!! そんなのは今の哲学の姿を知らない輩の戯言に過ぎない。これを読んだ後でも、現代の哲学が何をやってるのかわかると言えるのか?

【p.125の「1-1 項目が短く、つまみ食いしやすい」】

短いことはいいことだ。本書を構成するのは4-6頁ほどの短い項目だ。計51項目。どこから読み始めたって構わない。適当にページを繰って目についた項目から読む、目次を眺めて興味を湧いた章から読む……なに、勝手にしろ。お前は自由だ。ビュッフェだってそうだろう? 好きなものを好きなだけ読むがいい。

*

評者も一項目執筆している(この書評より全然保守的な文体だ)。テーマは「モナ・リザ」はどこにあるのか?。「おい馬鹿にすんな! ルーヴル美術館に決まってるだろうが!」——そんなヤツが聞こえてきそうだが、それに待ったをかける文章を寄稿した。ルーヴルにないのなら「モナ・リザ」はどこに行ってしまったのか。その行方は本書「すごい哲学」で確認を。

(投稿・伊藤迅亮)

(一七二頁 税込一五四〇円 12月刊)

〈特集〉

京大作家
インタビュー

お待たせしました！「京大作家インタビュー」第二弾は、書評家の三宅香帆さんにお越しいただきました。

三宅さんは在学中に、本屋「京都天狼院」の店長に就任。さらに書店のウェブサイトへ投稿した本紹介の記事が大反響を呼び、それをきっかけに作家デビューを果たしました。現在では数々の書評本や記事連載を手掛けられているほか、YouTube などにも活動の幅を広げられています。

「深く読む」ことの難しさから、「ひとりの自分をつくる」大切さまで。膨大な本と共に生きてきた三宅さんの内側に迫ります。
(黄丹・前髪・茫漠)

——本日はお忙しい中お越しいただき、ありがとうございます。本誌は京大の学生に向けた書評誌のため、まず学生時代のお話から聞きたいと思います。三宅さんは在学中に、書店員として本を紹介したブログをまとめた『人生を狂わす名著50』（ライツ社）で作家デビューされていますが、京大で過ごした時間は執筆活動に影響を与えていると感じますか。
(茫漠)

とても感じます。大学時代を東京で過ごしていたらこんなにいっぱい本を読めていなかったんじゃないかな、と。京都の方が、予定を詰めずにだらだらする文化が強いように思います。友達と無限に喋ったり、明日役に立つわけでもないような本を「好き」というだけでたくさん読んだり。当時は好きだからやっていったんですけど、今となっては大学生活のうちになんか時間を過ごせたのは貴重でした。「若いのにいっぱい本を読んでいる」と言っていただけることが多いんですけど、それは大学生生活が暇だったからかなあと思っています。



——興味のかまきままに読んでいた学生時代の「読書」と、仕

事としての「読書」に違いはありますか。

(茫漠)
私は「趣味の本」と「仕事の本」が違うタイプではなくて。例えば、『芥川賞の候補作全部読む』という企画があったら、その本自体に興味がなくても、芥川賞の五冊全てを読んで、なんとなく最近の流行が分かる楽しさがあると思います。一冊の本を読んでも内容を楽しむ以外にも、本を読む楽しさがありますから。私は大学時代に「歌話」という歌のルールが時代の流れの中でどのように成り立っているのかを和歌から読み解く研究をしていました。表現と時代の流れの関係に興味があり、そのような視点は書評を書く上でも私のベースになっていると思います。

——書評に対するお考えについてもう少しお聞きしたいです。三宅さんによるヒロイン批評『女の子の謎を解く』（笠間書院）で、「世界の見え方を変えてくれるのが面白い批評」とおっしゃっていますが、具体的にはどういうことか伺ってもよろしいでしょうか。（前髪）

例えば、お菓子ひとつとっても、「このお菓子の登場により京都のお土産文化が変わった」という「文脈」があることで、お菓子自体の見え方が変わりますよね。それと同じで、

流っている本や漫画を読むにしても、良い批評を読むと、その本が人気である時代背景が分かり、そんな現代に生きる自分のことが分かってきます。そして、自分がいる世界自体の見え方が変わってくると思うんです。そういう意味で、優れた批評はその作品だけにとどまらず、作品が映し出す世界の見方そのものを変えてくれる感覚があります。

作品を取り巻く文脈はたくさんありますが、自分が「この文脈だったら面白いな」と思える文脈を選んで書評を書いています。同じことを学問の場でやるなら、確実性の高い文脈を選ぶべきです。しかし私が今書いているような場では、いろいろな人に面白いと思ってもらえそう、かつ自分も楽しく書ける文脈を選び、とくとも思っています。

——「面白さ」は人によって違うので難しいと常々感じています。より多くの人に面白いと思ってもらうために意識していることはありますか。(前髪)

みんなの感覚と自分の感覚が重なっているところを選び取ることを意識しています。そのためにも、世間、つまり今マジョリティになっている層と自分が違うところを理解することがすごく大事だな。例えば、ヒットしているドラマとか映画、小説も読むように

はしているんですが、全然好みが変わらないところがよくあって。そういう時に、世間の感覚と自分の感覚との差分を考えることで「自分が重視する面白さ」も「自分とは違う、今流行している面白さ」も理解できるようになりますよね。すると「ここはみんなと自分の感覚が合致するだろうから、いきなり本題に入ろう」、「ここはみんなに分かってもらいたいから、丁寧に説明しよう」など、書評の書き方を調整するようになりました。

批評は今の世の中だと上から目線で悪いイメージがある気がするのですが、私は自分も世界もより深く知ることができるとして、作品批評っていいものだなと思っています。



——作品批評だけではなく、「それを読むたび思っています」(青土社)のようなエッセイも書かれています。こちらは三宅せん初の自叙伝で、ご自身の幼少期から社会人までの心の揺れ動きが繊細に記されています。その中でも、三宅さんの学生時代の感覚は、私にも重なる部分がありました。この本は、どのような読者を想定して書かれたのでしょうか。

(茫漢)

ありがとうございます。この本は平成生まれくらいの世代の、地方出身の方々に向けて書いています。地方出身だけど、地元で特別な恨みがあるわけでもなく、とはいえず普段接している都会出身の友人に「いいな」と感じてしまう瞬間はある、みたいな人は意外と多いと思うんです。だけど、そのような方々の感覚ってまだ言語化されていないのではないかと感じていました。ネットで地方の話をする時、「うちのほうがもっと恵まれていない田舎だった」という競い合いになるだけで、不毛な議論になってしまっことが多くて。そのように自分の出身地をただ嘆くのではない、出身地は地方だったけど今はそれを受け入れて頑張ろうとしている人に向けて書こうと考えました。

——このエッセイで、自転車のお話がたくさん出てくるのが印象的でした。三宅さんにとって自転車とはどのようなものですか。(前髪)

たしかに。自転車に注目されたのは初めてです！ うーん、私にとって自転車は、学生時代の象徴のように感じているのかもしれない。学生時代を思い出すと、いつも友達と自転車で並んで喋っていたのが浮かんできてくる

んです。

出身の高知県は電車もバスも全く使わない文化だし、京都も自転車移動の多い場所ですし、逆に電車は都会の象徴のような気がします。

——書評やエッセイに続けて、小説など物語を創作したいと考えていらっしますか。

(黄丹)

——創作は今のところ考えていないですね。一回漫画にハマったときに二次創作をしたぐらいです。世界は読みたいもので溢れているので、創作をする理由がありません。私にとって今一番面白いのが、創作ではなく、批評なんだと思います。

——批評に興味を持ったきっかけは何でしたか。(黄丹)

批評自体を面白いなと思いだしたのは大学三回生くらいでした。内田樹さんとか、大塚英志さんとか、読みやすい漫画論、映画論、小説論を書いている人と出会ったタイミンが良かったです。最初はエッセイから入って、他の文章を読むうちに批評と出会って、みたいな感じですね。

その後、四回生で出会った英文学の先生に「読むことのクリエイティブさ」を教わりま

した。最初の授業で先生が「読むって難しいことなんだよ」とおっしゃっていたのが印象的。同じものを読んでもただだけのことを引き出せるかというのは人によりまして、そういう意味で「ちゃんと読む」って、意外と難しい。大学の先生という「読みのプロ」に読み方を教わって「私もこういう風に読めるようになるみたい」と思いました。



——続いて、就職後のお話についてお聞きします。大学院修了後は東京で就職され、作家業を兼業なさっていたそうですが、当時の生活で大変だったことや良かったことはありますか。(黄丹)

大変だったのはシンブルに時間がなかったこと(笑)。今専業になってすごく健康的な生活ができています。兼業時代は不規則で不健康な生活をしていました。当時兼業をしていたのは、今考えてもそれ以外に選択肢がなかったからです。ね。書く仕事も含めて、あまり収益にならない自分の好きなこ



とを仕事にしたい時って、とりあえずキャリアを積み期間が必要ことが多い。今振り返っても「最初から専業でフリーランスになっていたら良かった」とは全く思わないですね。自分のやりたい仕事をやるためには、キャリアを積み兼業期間を設けることをおすすめています。ただ時間面と健康面で大変なので、若い間にはやっておくとか、時間を確保できる仕事を選ぶとか、工夫は必要だと思います。

——個人的な話なのですが、私は今就職活動中で……。三宅さんが進路を選ぶ際に重視されたことをぜひお聞きしたいです！(黄丹)

自分がしっくりくるかどうかを重視していました。しっくりこなかったら、途中で進路を変える。自分で一回決めたことを辞めるのは、世間では悪いことだと思われがちですが、私は全然悪いことだと思いません。私は一回就職しようとしてやめて、院に行きました。今思うと、そんなに綺麗に決めようとしなくても良かったよな、と。結局、延長に延長を重ねて、七年京大で悩み続けて、やっと進路に納得できるようになりました。長くいることがいい訳ではないけれど、社会に出たら京大みたいな悩みがありません。いい選択肢を見つけたらそれが結果として自分に返ってくるだ

け。他人の言うことを気にせず、自分が納得できるまで悩んだ方が将来的には後悔がないのではないかと考えています。

私は元々自分の考え方が他人に揺さぶられない方なんですけど、それは文学をやっていたことと関係しているかもしれないです。私が普段相手にしているものって、プロの作家さんがめっちゃくちゃ労力をかけて一個のことを伝えようとして書かれた本なので。「私を揺さぶるなら本一冊かけて説得してよ」と思ってしまうんですよ。

そういえば、就職した会社の部長に、「新卒の段階で三宅さんくらい自分が出来上がっている子いないよ」と驚かれたんですけど、文学に関わっていると頑固になるのかもしれないです。そもそも、頑固に自我が出来上がっていないと、本なんて書かないでしょうけど(笑)。

——最後に、大学生に向けてメッセージをお願いしてもよろしいでしょうか。(黄丹)

月並みですが、本は読んでおくといいたいです(笑)。今の時代、読むことがあんまりクリエティブな行為と見なされていないと感じています。というのも、読書は人にシェアしています。だからだと思ふのですが。たしかに読書ってひとりでもやる趣味で、友だちと

楽しむ方向性の趣味ではない。ですが、大学生の時期に本や音楽や映画などに触れて、自分だけの好みや思想をつくっておくと、「自分はこの人間的」という確固たる骨格ができると思います。そういうひとりの自分をつくる時間があるのが大学生の良いところかなあと。今は自分と向き合う時間を楽しんでみるのはいかがでしょう。



インタビューを終えて

改めまして、貴重なお話をありがとうございました。インタビューを通して、三宅さんのお人柄や書評愛を知ることができ、また違った視点で著書を読めるようになりました。

『人生を狂わす名著50』や『女の子の謎を解く』、『それを読むたび思い出す』がインタビューのオススメです。『人生を狂わす名著50』で三宅さんは語ります。「私にとって読書は、戦いです」と。「私は人生こう生きたい!」という思いがあるのに、魅力的な本が違つ道へ引つ張り込もうとしてきて、それに抗う戦い。でも足掻いても惚れたもん負け人生賭けても理解したい本たちと出会ってしまつし、そして「私の人生はその本のも」。優しく語りかけてくれるような文章の

中で、本への愛と情熱がほとばしる、三宅さんの多種多様な著書たち。皆様も、ぜひ京大生協で手に取ってみてください! 本記事読了後に三宅さんの著書を読むと、読むことがいかにクリエイティブかに気付けること間違いなし!

ちなみに、自転車でお帰りになられる姿をお見送りし、やっぱり自転車と三宅さんには何かある……と思っております。皆様の自転車論もお聞かせください!

(黄丹・前髪・苅漢)



新刊コーナー

外国語の遊園地

黒田龍之助著

白水社



たとえば、財布を開いてみる。そこには紙幣や硬貨がある。レシートやポイントカードも入っているかもしれない。著者・黒田龍之助はこうしたものに書かれている文字に目を向ける。このエッセイ集は、外国語の「ものが語る」物語である。

「文字さえあれば、語学はそこから始まるのである」。こう綴る著者は、スラブ語学の専門家であるが、驚くほど軽やかに、様々な言語を学ぶ。自宅の壁には何種類もの外国製のカレンダー。スロベニア語やチェコ語、英語やフランス語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語、ロシア語、さらにはドイツ語。カレンダーに書かれた月名と曜日名から物語が溢れ出す。

著者の生活には自然とことばが集まってきているように見えるが、決してそうではない。毎朝外国語の例文を書き写し、毎日外国語で

読書をする。実際に外国語を学んだ経験のある人なら知っているだろう。これらはそう簡単なことではない。それでも、著者の綴る物語に触れると、なんて楽しそうな、なんて豊かな時間なのだ、と感じずにはいられない。新しい生活が始まる春。今日から新しい言語を学んでみるのはどうだろう。この本はきつと、ことばと向き合うあなたをひと押ししてくれる。毎日の生活にたくさんのことばがあると気づいたとき、身近なものがこれまでとは違って見えるはずだ。それこそがことばの魅力なのである。(ひるね)

(二四八頁 税込二四二〇円 2月刊)

ポエトリー・ドッグス

齊藤倫著

講談社



住宅街の奥に佇むバーは、いぬのマスターのお店だった。ふさふさと毛並みのよい手(脚?)で作るお酒はどれも極上。そんな不思議なバーのお通しはなんと「詩」である。にんげんの「へほく」といぬの「マスター」が数々の名詩を巡って繰り広げる会話。

都会に、社会に、人間関係に揉まれ、疲弊した人こそ読んでほしい一冊。

バーで出される詩は、エリオットから室生犀星に至るまで東西の洋を問わない。正直なところ、詩人の名を知らないだけでなく、一読しただけではわからない、なんて詩も出される。だがそれも仕方がない。へほくも度々言っている、「いやあ、詩は、むしろかしいなあ」と。一方で、いぬのマスターは物知りだ。詩の背景、詩人の略歴等々……「かみくだかず、まるのみしているだけです。いぬの習性でしょうか」。

「ただしりたいのです。にんげんが、物事をどのようにとらえるのかを」。詩にはにんげんのような想いが込められている。孤独、性、暴力に対する想いが……。へほくは酔った頭で、マスターと共ににんげんについて自分について考える。へほくが吐き出す言葉に、マスターは率直に答えてくれる――

「ひとりではないのです」。

詩は難しくてわからない。だが、その先に共感を呼び、新たな世界を拓いてくれるものがある。初めて来店したへほくにマスターが出したエリオットの詩は、こう始まる――「さあ、いっしょに出かけよう、君と僕と……」。

(一九二頁 税込一七六〇円 10月刊)

まあたらしい一日

ついでにしんじ著

tupera tuperaイラスト

ジーエル出版

春風が、優しく桜

色や黄色の空気を棚

引かせる。今回はこ

の時期にぴったりな

タイトルを持つ本を紹介したい。



『まあたらしい一日』小説家で、読売新聞

にて「人生案内」も務めるいししんじと絵

本、舞台美術など幅広く活動するTupera

tuperaが「ラポして作られた本だ。いししんじ

の紡ぐちいさく愛しいお伽話」Tupera tupera

のかわいく奇妙奇天烈な絵たちが、微妙に噛

み合っていないような、でも絶妙にマッチし

ているような、不思議な空気が楽しい。小

説も絵も、描かれていない物語を沢山秘めて

いそうで、妄想がかき立てられる。双方京都

在住で、丸善京都本店にて本書の刊行記念イ

ベントが行われた。大型屏風が用意され、即

興でいししんじ氏がマジックで画用紙に物語を、

tupera tuperaが色画用紙や包装紙を切り抜い

て奇想天外な生物たちを生み出し、貼り付け

た。物語と絵、さらには観客の言葉が響き合

いながら創作が進むのを目の当たりにした評

者はその様を美しく思い、各人の発想がもくもくとくっつき合ったこの本をますます素敵に感じたのだった。

最後に本書の二編「本と踊り子」を。

髪と衣装が本でできている踊り子の絵がか

わいい。「男は、踊り子が描かれた本を、こ

よなく大切にしていました」。ここから綴ら

れるお伽話は、どこか千一夜物語のよう。優

美で幻想的。男の通夜、風のない中、とうめ

いな手に本のページがめくられ、はがれ、踊

り子たちはろうそくのほのおに足をふみ入れ、

燃えつきる。——まるで闇に蒸発するみたい

に、静かに、かつ、おどそかに。(黄丹)

(八〇頁 税込二四二〇円 10月刊)

別冊太陽 佐伯祐三

その眼がとらえた風景

高柳有紀子監

平凡社

どこか詩人のラン

ポーを思わせる神秘的

な眼。覗き込むと

思わず吸い込まれて

しまいそうになる、そんな危うさを秘めた眼。

これは天才だけが持つことを許された眼だ

——私はそう感じた。この眼の持ち主は天逝

の画家・佐伯祐三。一八九八年、大阪で生を



享けた佐伯は、一九二八年、パリで死を迎える。わずか三〇年の短い人生だった。しかし、

佐伯の作品は、生涯の短さと反比例するかの

ように、長きにわたって強烈な印象を人びと

に与え続けている。本書は、そんな佐伯の生

涯や作品を丹念に追跡し解説した一冊である。

佐伯は絵に取り憑かれた人間だった。「な

んばでもデッサン」が口癖だった美術学校時

代を終えると、佐伯はパリに留学する。佐伯

はこのパリ留学で大きな転機を迎えることに

なる。ルノワールやセザンヌを研究していた

佐伯は、新作『裸婦』を携え、巨匠・ウラマ

ンクを訪ねた。しかし、ウラマンクは佐伯の

絵を一瞥するなり「このアカデミック」と

怒号を飛ばした。佐伯の絵は否定されたのだ。

以降、佐伯は自らの表現を求めて苦悩の日々

を過ごす。そしてこの苦悩のなかで見出され

たのが、パリの街角の「壁」だった。「薄汚れ、

年季の入った壁や看板などを厚塗りのマチエ

ールで描き出すスタイル」、それを佐伯は確

立したのだ。佐伯はこうして、皆と異なる独

自の眼で、パリの街を新たに発見していく。

大阪の中・高美術館では四月一五日から佐

伯祐三の特別展が開催される。これに行かな

い手はないだろう。佐伯の眼が捉えたパリの

姿は、あなたを釘付けにするはずだ。(はや)

(二六八頁 税込二八六〇円 1月刊)

ある行旅死亡人の物語

武田惇志 伊藤亜衣著

毎日新聞出版



始まりは小さな新聞記事だった。多額の現金を持ったまま孤独死した女性。相続調査が必要だが、身元がわからないという。家に残された身元確認の書類はほとんどない。社会との繋がりをほとんど残さなかった彼女は、いったいどんな人だったのか。取材のネタ探しをしていた著者が偶然記事を目にしたことから本書が生まれた。

保険証もなく、年金も貰わず、質素に暮らしていたという彼女。手がかりは生前に彼女が残した一言と印鑑、それに写真。住んでいた家の賃貸契約者は別の人間で、近所の人曰く「そんな人見たことない」。身元不明、現金の出所不明、人間関係不明。それでも取材のたびに少しずつ身元が明らかになっていくのは、幸運もあつただろうが彼らの粘り強い聞き込みが引き出した結果といえるだろう。反面、すべて明らかになりハッピーエンドともしかないのが現実だ。引き出せなかった情報があるのやらないのやら……。

ちなみに彼女の血縁関係は明らかにならなかったが、親族でも彼女がどう生きていたのかわからないまま記者から取材を受けて彼女の死を知ったのは興味深い。地域的なコミュニケーションが少ないという問題はよく聞か、高齢の親族同士の繋がりが薄くなっているのかもしれない。

無名で消えたはずの彼女の物語を掘り起こした記者の一人は人環の出身らしい。こんな所に京大生らしきを感じるのには評者だけだろうか。どんな顛末になったかは本書を読み進めてもらいたい。

(二二六頁 税込二七六〇円 11月刊)

太陽の子

日本がアフリカに置き去りにした秘密

三浦英之著 集英社



二〇一六年某日、朝日新聞の記者として南アフリカに駐在していた著者のツイ

ッターに、一通の不可解な投稿が寄せられた。朝日新聞社は、一九七〇年代コンゴでの日本企業の鉱山開発に伴い一〇〇〇人以上の日本人男性が現地に着任し、そこで生まれた子

どもを、日本人医師と看護師が毒殺したことを報道したことはありませんか？ 聞いたこともない新生児殺しの疑惑だが、添付されたフランス国営報道機関のネット記事には東洋人風女性の証言映像もある。報道の信憑性を疑った著者は、真相解明のため現地取材を決意する。本書は、日本人男性とコンゴ人女性の間に生まれ、鉱山の閉鎖と共に置き去りにされた残留児に光を当てるノンフィクションだ。

コンゴ民主共和国に入ると、日本人の父を持つ現地住民が次々と現れる。ケイコ、ナナ、コウヘイといったジャパニーズ・ネームを持ち、容姿もコンゴ人と異なる残留児は、当時十代の少女だった母親たちとともに父系社会の中に置き去りにされ、貧困と差別に苦しみながら生きてきた。著者は彼らへのインタビューを通じて五〇年前の真実を追い求める。残留児から得たわずかな情報を手がかりに父親を探すが、待ち受けていたのは「父親にも今の暮らしがある」という無責任で都合の良い態度だった。そして膨大な取材の果てに、新生児殺しの真実が明らかになっていく。

戦後日本の輝かしい成長の陰で歴史の闇に葬り去られていた残留児たち。遠いアフリカの地で今も日本人として生きる彼らの姿に、日本で生きる我々は何を思うか。(たいやま)

(二二〇頁 税込二七五〇円 10月刊)

生活史論集

岸政彦編集
ナカニシヤ出版

「あの人は何故生きているんだろ」と思った経験はないだろうか。あるいは「自分はなんのために」と。

本書には、今春から京大に着任した気鋭の社会学者・岸政彦が編んだ、生活史——個人の生い立ちと人生の語り——をめぐる一〇の論考が収められている。

私たちはこの社会の「訳の分からなさ」に絡め捕られつつ、日々何かを選択し、来た道を振り返るようにして、その選択に絶えず意味を付与する。そうして緩やかに縁どられた「人生」を、私たちは歩んでいく。

「個人的なことは政治的なこと」という第二波フェミニズムの標語に倣えば、本書に登場する生活史はどれも断片的で、バラバラで、極めて「個人的」だ。フィリピンで国家による強制立ち退きにあった人。震災で最愛の夫を亡くした人。戦後沖繩の復興を生き抜いた人。しかし、それらは同時に「社会的」——人間は皆（きつとあなたも！）社会という濁

流の中で懸命に泳ごうとする——だ。この点にこそ、無関心がはびこる現代社会で「他者」を理解することの可能性が宿っている。

本書では、一〇人の社会学者が人々の生活史に耳を傾ける。その中に浮かび上がる社会の「訳の分からなさ」は、歴史と構造へと解きほぐされ、そこで逞しく生きる人間の姿が描き出される。本書は「人の語りを聞き」、「他者を理解する」という社会学の営みの優れた成果であり、読者の「理解」の枠組みを押し広げてくれるはずだ。（投稿・浅煎り）
（五三〇頁 税込三九六〇円 12月刊）

消費と労働の文化社会学

やりがい搾取以降の「批判」を考える

永田大輔・松永伸太郎・中村香住編著

ナカニシヤ出版



「やりがい搾取」という言葉を聞いたことがないだろうか。

一五年前に教育社会

学者の本田由紀が、企業が職場の仲間意識や若者の自己実現願望を利用してサービス残業や低賃金を押し付けることを「やりがい搾取」と呼んだ。この語は広く認知され、ブラ

ック企業等に対する強力な「批判」となった。しかし他方で「企業のお題目にまんまと騙される労働者」という見方は一面的でもある。

本書は消費文化の進展が「やりがい搾取」と深い関係にあるのではないかとという視点から、従来切り離されてきた「消費」と「労働」のあいだに在る「生活者」としての労働者に焦点を当てた論文集である。三部構成でそれぞれ著者の異なる計一四本の論文が収録されており、第一部は「消費（者）」と労働（者）の関係性」、第二部は「消費文化と関わる労働と生活」、第三部は「新しい労働者像と『批判』の可能性」が論点となっている。

中でも論文の一・二本目と最後の一四本目は特に理論的な内容で、消費社会学や新自由主義批判、フランクフルト学派の産業文化論といった議論に触れることができる。かといって敬遠する必要はない。間に挟まれた三〜十三本目には「二次創作」「アイドル活動」といった日本ならではのテーマや、「サラリーマンが読む雑誌」「人事査定」など将来身近になるトピックが散りばめられている。

消費も労働も、誰もが日々避けて通れないものだ。本書を通じて、理論と現場の両面から接近してみよう。就職活動に悩める人は将来のヒントが見つかるかも？（りっちゃん）

（二八四頁 税込二九七〇円 1月刊）

エリア随筆抄

チャールズ・ラム著

南條竹則編訳

岩波文庫



「本当に心の暖い人であつたと思ふ」と西田幾多郎が感想を籠めて評するラム

は、大学にも行けず詩人にもなれなかった上に、母親を刺殺してしまった精神病の姉を世話しながら働かなければならなかった人である。彼がエリアという架空の人物に仮託して随筆を書き始めたのは四五歳の時であった。

作家の身辺のありきたりな話を読まされるのは話らないことのようにだが、打明け話には打明けることが目的でないものもあるもので、作家が打明けの勢いを借りて話している時にはその話し振りが感じられればよいのだ。

ラムがエリアの名で書いたのは幹晦(みづくろ)というだけのごとくなく随筆の中味にも作用しているのではなからうか。事実を切り取り、省略し、並べ替え、時に嘘を交えることで、エリアの話し振りを創作しているのである。

「バトル夫人のホイストに関する意見」は中でも私の気に入った作品だが、この夫人はカード遊びをするために生まれてきたと本気

で思っているという、喜劇にでも出てきそうな奇人であるにも拘らず、彼女も、彼女を敬愛するエリアも、不思議なことになつとも滑稽に見えない。「除夜」でいじいじと昔を懐かしみ死を恐れるエリアも、厭わしい老人でなく愛すべき年長者の風貌を伴って現れてくる。彼はまた、夫人の信条に反する遊び方への愛着を露わにしたり、詩を引いて新年を言祝ひたりもしている。そこには、執着なく世界を見る素直な眼の清々しさがあふれている。エリアの話し振りの端々に表れているのは、全てを包むかのような暖い心である。(投稿・逸業)

(三四四頁 税込二〇二円 10月刊)

新装版 アウシュヴィッツの残りのもの

ジョルジュ・アガンベン著

上村忠男・廣石正和訳 月曜社



フーコーが展開した「生政治」をめぐる議論。それを批判的に継承することで

開始された『ホモ・サケル』プロジェクト。アガンベンのライフワークとも言うべきこのプロジェクトは全四部から成るが、本書はそのうちの第三部に当たる。同プロジェクトの

第一部『ホモ・サケル』では、収容所こそが近代的な生政治の範例であるとされたが、本書ではその記述を受けて、収容所の極限的な事例であるアウシュヴィッツに、なかでもとりわけ同収容所内で「回教徒」と呼ばれていた人びとに焦点が当てられる。生政治の権力に容赦なく晒された回教徒の「剥き出しの生」を分析することで近代的な生政治の実態を明らかにすること、それが本書の目的である。

では回教徒とは何か。「彼はよろよろと歩く死体であり、身体的機能の束が最後の痙攣をしているにすぎなかった」。回教徒は「人間」と「非人間」、また「生」と「死」の狭間にいる。アガンベンはこの狭間を「閾」と呼ぶ。彼らは「生きた屍」であり、死んだように生きている。それゆえ彼らにおいて「人間」と「非人間」の区別は消え去っている。彼らはこの意味で「閾」に落ち込んでいるのである。こうした極限状態に生きる回教徒は、証言する能力をもはや持たない。しかし、生き残り証人でもあるレーヴィは「回教徒こそが完全なる証人である」と主張する。ここにひそむパラドックス、つまり証言しえない者こそが真の証人であるというパラドックスをどう解くか、これが本書を貫くテーマとなる。

(二二四頁 税込二八六〇円 12月刊)

旅行の世界史

人類はどのように旅をしてきたのか

森貴史著 星海社新書

二月末日、二名の宇宙飛行士候補生が新たに誕生した。月面を踏み最初の日本人となるかもしれない二人である。本書において、著者は「旅とは〈未知〉を体験し、それを〈既知〉とする経験である」と述べる。日本人が古くから思いを馳せてきた、しかし未踏の地である月。私たちは今、〈未知〉が〈既知〉となる瞬間を目の当たりにしようとしている。

本書は、人類がまだ見ぬ場所への到達を目指して積み重ねてきた旅の歴史を描く。最古の英雄叙事詩ではギルガメッシュ王も旅をした。あらゆる身分の人々が聖地へ向かって旅をした。そして大航海時代、未踏の地を目指して人々は海を越えた。〈未知〉を目指して進む旅人とそれに呼応し進歩する科学技術。人類の到達範囲は、この積み重ねにより拡大してきた。そしてこれを支えたのは旅人たちが残した旅の記録である。著者はそれらを旅にまつわるあらゆる事柄とともに丁寧に読み解く。本書を閉じたとき、心に浮かぶのはきっと次の旅の目的地だろう。人類の旅の軌跡は私たちを〈未知〉へと突き動かす。(ひるね)

(三二八頁 税込二四三〇円 2月刊)

英語と日本人

――挫折と希望の二〇〇年

江利川春雄著 ちくま新書

四月からの新学期。新入生は大学に入っても共通科目で英語の授業を取る必要がある。最近では小学校から英語教育が行われているが、大学に入ってまで英語を勉強して、それでも英語ができないなどという人がざらだったりする。日本人はどうして英語を学び、また苦手意識を抱くのか？ 簡潔にまとめられているのが本書である。

読んでいくと、現在出ている問題点が英語教育の始まった明治期には既に日本人の頭を悩ませていたことがわかる。低年齢からの英語教育、英語公用語論、コミュニケーション重視の教育内容。そういった教育論は周期的に主張されては廃れ、また現れてきたのだ。ただ、昔は本を読むあるいは筆記するのが主だった学習法は、最近では電子機器の出現やその進歩とともに大きく様変わりした。本書では新しく登場したAIを使用する学習についても取り上げられている。この先、英語の勉強に苦勞しなくてすむ時は来るのか。淡い期待を持たせてくれる一冊かもしれない。(ねい)

(三〇四頁 税込二〇二二円 1月刊)

普通という異常

健常発達という病

兼本浩祐著 講談社現代新書

非定型発達や「発達障害」とされるADHDやASDに対し「健常」で「普通」だと見なされる定型発達の脳も、見方によっては「病」を抱えている。例えば非定型発達の脳は報酬系が上手く働いていないとされている。しかし裏を返せば定型発達の脳は、羨によって愛美が無くとも社会規範に従うことで自体に喜びを感じることが可能になる。「ドーパミン移行過剰症」である。つまり実に馴致しやすい、言わば「付度過多症候群」なのだ。

著者は健常発達を他者依存的な人格形成として特徴づけ、「いじわるコミュニケーション」や「いいね」依存、ポップアートといった身近な現象を分析する傍らで、そもそも他者に規定されない「本当の私」はどこかに存在するのか、私たちは「本当の私」という神経症的幻想」とどのように付き合うべきかとも問う。フロイトが主体的な自己像に疑問を呈して以来、ハイデガーもサルトルもドゥルーズも、皆この問いについて考えてきた。「生きづらさ」の問題と近現代哲学がグッと近づくと補助線となる一冊。(りうち)

(二五三頁 税込二一〇〇円 1月刊)

金子みすゞ——やさしく、かなしく、みずみずしく

子どもの頃、私の母は毎晩眠る時、数冊の絵本を読み聞かせてくれた。当時のお気に入りの一冊であり、今も脳裏に焼き付いて離れないのが金子みすゞの『ほしとたんぼ』(JULA出版局)である。小気味良いみすゞのうたと上野紀子のうたへ優しい水彩画が、幼い私を安らかなまじろみへと誘っていった。歳を経ることにみすゞのうたに触れる機会は減っていったが、それでも私の生き方に大きな影響を与えてくれた金子みすゞ。本年四月一日はそんなみすゞの生誕一二〇年目にあたる。



金子みすゞの生はあまりに儂い。みすゞの幼少期、金子家は本屋を営み始めた。彼女の類まれなる才は、文化的な家庭環境によるものが大きいだろう。二〇歳になったみすゞは親戚の本屋で働く傍ら童謡詩を書き始めるが、その才は詩人西條八十に「若き童謡詩人中の巨星」と言わしめるほどであった。娘も授かり順風満帆に見えた彼女の人生はしかし、一転する。夫はみすゞを家庭に縛り、童謡を書けんことを一切を禁じた。そんな夫との生活に疲弊し、愛娘の親権が得られぬことへの絶望から二六歳の若さで彼女は自ら死を選ぶ。

やさしく、かなしく、みずみずしく

『あしたのジョー』などで知られる漫画家ちばてつやは、『わたしの金子みすゞ』(ちくま文庫)の中で語る——「見えないうちにまで寄せる慈しみが、みすゞさんの創作の原点のように思えます」。「大漁」や「おさかな」に見られるように、彼女はこの世のすべて、植物、動物、ひいては雪に対してまで慈しみの眼を向ける。そのあまのやさしさに我々は、他の生を奪ってしか生きられない人間の

性、それでも自然の恵みに無頓着な人間の有様に時としてかなしみを覚えずにはいられない。彼女のうたは、私たちが決して忘れてはならない命の尊さを素朴に語りかけるのである。



命を慈しむ心は、自然の恵みを素直に喜ぶ。彼女のうたがもつもう一つの魅力は、飾らない言葉に漲るみずみずしさにある。みすゞ生誕一二〇周年を記念して出された『金子みすゞ童謡全集』(JULA出版局)には、五二編のうたが収められている。今この時にぴったりのうたを引いて、この書評を締めるとしよう。

四月

新しい御本、

新しい靴に。

新しい葉っぱ、

新しい枝に。

新しいお日さま、

新しい空に。

新しい四月、

うれしい四月。

(はらた)

1961年

副目せよ、この一冊——『社会哲学の復権』に。

さんざん韜晦してサラバと言ったはずなのに、なんの因果か今号でも駄文を晒す運びとなってしまう。どうせだ、好みに書こう。そう、この二年間で読んだ中の白眉、『社会哲学の復権』について。

古い本である。講談社学術文庫版は一九九六年、せりか書房の旧版に至っては一九六八年の出版で、文体といい内容といい、風格は古典のそれである。なお、旧版は国立国会図書館デジタルコレクションで公開されているが (<https://dl.ndl.go.jp/pid/3038423>)、文庫版の入手は困難を極める。再版が願わしい——変わらぬ要請、「社会哲学」を、かくも正面して論じた書はなかなかなければこそ。

著者が「社会哲学」と述べるとき、そこにはふたつの含意がある。ひとつは社会の哲学的考究、すなわち「社会の哲学」、もうひとつは社会科学基礎論、すなわち「社会科学の哲学」である。とりわけ前者について、序文で「社会科学との対決」という課題を設定するときの切迫感、現代の読者からするとあるいは特異に映るかもしれないが、これは当時の社会科学において、マルクス主義者やパーソンズ的システム論者が歴史主義、進歩史観を共有していたことに由来する。本書第三部の主題のひとつが歴史主義的なもの、哲学におけるその隆盛を意識してのことであろう。さらに、かかる事情を確認することで、第一部でフランクフルト学派、就中アドルノに(せいぜい)「社会哲学の復権」とはアドルノの立場の形容である(一)

第二部でウェーバーに着目し、二〇世紀ドイツ思想にひとつの潮流を示してみせる著者の議論も多少分かりやすくなるかもしれない。歴史主義批判、ユートピア思想批判こそ両者の結節点なのである。「絶対的真理をユートピアとして堅持しつつ、それが未だ実現されていない」ということを明らかにする現実批判を通じて、逆に証していることとする「批判理論、その中心人物としてのアドルノにおける「否定性とユートピア」の問題を論じつつ、そのような思索の萌芽、「哲学への胎動」をウェーバーに、その価値判断論と合理化問題に見る議論は、時代を隔ててもなお、読者を惹きつけてやまない。

では、本書が読まれる現代的「布置状況」とはいかなるものか——随感をば。たとえば同時代人たちとの比較。ユダヤ出自や亡命といった共通点の一方で、批判理論の対岸、ネオコンの教祖に祭り上げられてしまったレオ・シュトラウスが先人ウェーバーを痛烈に批判したこと・精神分析に始まり、他方で、未だ実現されていない「人間」の完成を「意識の明晰さ」に訴えた解放の理論家ファンロンが、その限りではフランクフルト学派と奇妙に共通すること、など。それぞれの「布置状況」の案内に、ここでは「レオ・シュトラウスの政治哲学」(ミネルヴァ書房)と「フランクフルト学派」(みすず書房)を挙げよう。あるいは『フランクフルト学派』(中公新書)を先に読むのもよい——書き連ねたいことはかりだが紙幅は尽きた。「結局文筆家は執筆に安住することすら許されていない」のだから。

(侯爵)

編集後記

私が『綴葉』に入った頃、桜が咲いていた。入学の季節だった。その頃の『綴葉』は時代の中で喪われていく教義主義の香りを存分に漂わせていた。一文字、一文を巡って院生達が議論しあい、時に激しい討論になる様を新人の眼でぼんやりとみていた。

私が『綴葉』の編集長だった頃も、桜が咲いていた。進学の時節だった。お世話になった先輩たちがいなくなり聡明そうな後輩たちが入ってきた。喧々譁々の空気は柔らかくなり、編集会議の後によく飲みに行った。桜の下で宴会をし、夏は鴨川に足をつけて書評とは何かを語り合った。終わりのない雑談の中で、川岸に沈んでいく夕日を眺めていた。

それから季節が巡る度に後輩たちを見送ってきた、私は変わらずに『綴葉』にいた。時々昔卒業した子が少し疲れた顔をして帰って来た。「ここは変わらないですね……。」変わっていく世界の中で、私たちはいつも変わらないものを求めていたよね。

私が『綴葉』を去る時、桜が咲き始めた。卒業の季節だった。巡り続ける時の中で、『綴葉』は変わらずあの頃の香りを漂わせている。

その香りが、好きだったんだ。

(きもの)

当てよう！ 図書カード

日本で「春の花」といえば、桜でしょう。桜に関連した表現は日本語に多くありますが、中にはいけずなものも……。かつて京都では、花と鼻を掛け、鼻の低い女性をある桜に喩えてからかったそうです。さて、その桜とは何でしょうか。

1. 普賢象桜
2. 千眼桜
3. 御室桜
4. 時雨桜

(前髪)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは5月15日です。



《12月号の解答》 12月号の問題の正解は、3. の紅マドンナでした。そろそろみかんの季節も終わりですが、もし店頭で紅マドンナを見つけたらぜひ買ってみてください。腰が抜けるほど美味しいですよ。図書カードの当選者は、くしさんさん、真っ二つさん、とけいさん、すみれさん、まーぼさんの5名です。当選おめでとうございます。(はらん)

読者からひびく

〇いつも楽しく読ませて頂いております。特集があるとテーマに沿ってそれに関連する本がいろいろ紹介されていて、面白いです。今回の場合だと、ひとえに「ロシア」といういろいろなアプローチがあって、本の奥深さを実感します。(経済学部・よっしー)

〇いつも手に取って頂きありがとうございます。『ロシア・ソ連』特集は難しいテーマであり、評者三人も頭を悩ましておりましたが、読者の方に刺激を与えられる書評となったなら本望です。

〇以前読者からのひとことに掲載していたいたとき、もしかして綴葉に応募した？と知人に聞かれました。驚くと同時に、読者仲間であったことを嬉しかったです。(医学部・しおん)

〇『綴葉』で紹介された本を、ご友人とさらに批評してみるのも面白いかもしれません。本誌をきっかけに、人の輪が広がっていったら嬉しいです。

〇六年間、綴葉を楽しみに読んできましたが、もうすぐ卒業と思うと感慨深いです。

——長きに渡るご愛顧に感謝！(法科大学院・真っ二つ)(はらん)